



いずみ

No.89

街なかの美を守ろう

(題字 國松 明日香)

自作自選 59



《GINGER》

内藤 満美

(2ページに「作者の言葉」)

自作自選 59

作者の言葉

木、針金に棕櫚（しゅろ）縄を巻いた心棒には、どんどん粘土がつく。ここの作業が一番好きな時間。何も考えず、モデルと作品、そして私の手、全身でスポーツのように粘土をつけていく。

この時間があるから私は今でも彫刻をつくり続けていると思う。そのあとは少し苦しい。そして 石膏取りをして完成となる。
(札幌市在住、全道展会員)

タイトル	: GINGER
制作年	: 2024年
素材	: 石膏
サイズ	: H45×W47×D40 cm
設置場所	: 作者蔵

連載

宮の森の四季 59

本郷新記念札幌彫刻美術館

「味わい」の「心地よさ」

芸術の森事業部長 上野 勝久

昨年の4月に彫刻美術館を所管する芸術の森事業部長に着任して以来、業務上、芸術の森かコンサートホール Kitara のどちらかにいることが多いのですが、毎月、彫刻美術館を訪れています。

訪れるたびに、彫刻美術館は毎回違った表情を見せてくれますが、私としては何かの「味わい」により、「心地よさ」を感じるなといつも思っています。

なぜ「味わい」を感じるのか、自分でもはっきりとわからなかったのですが、改めて「味わい」の意味を調べてみると、「妙味、趣（おもむき）」というのがありました。

そこで「妙味」の意味を調べてみると、「非常にすぐれた趣」というのがあり、「趣」を深く感じているということがわかりました。

それでは「趣」とは、と調べると「そのものが感じさせる風情、全体から感じられるようす・ありさま」という意味がでてきました。

ここでやっと合点がいきました。私が感じていたのは、彫刻美術館の個別の要素ではなく、そのときどきから受ける全体の印象が「心地よさ」を感じさせてくれていたことを。

彫刻美術館を訪れる方は、何かしらの印象を受けると思いますが、私同様、何か「心地よさ」を感じていると推察しています。



あり 蟻と塔

会 員 笹山 恵利

道立自然公園野幌森林公園の「北海道百年記念塔」は、竣工から 53 年を経た昨年、老朽化と維持管理問題などを理由に解体された。解体をめぐる賛否両論の中、工事は 4 月に着手され、7 月に終了した。

設計はコンペ形式で全国から公募され、最優秀賞を獲得したのは弱冠 29 歳の一設計事務所所員、井口健氏であった。その精緻なデザインは、審査委員長の日本建築家協会会長から「北の大地の交響曲」と激賞された。1970 年に竣工した記念塔は、以来、風雪に耐えるとともに、時代の変遷の中でアイヌ同化政策批判の側からの誤解にもさらされた。しかし、氏の設計理念は最後まで一貫していた。「北海道の歴史とは明治以来の開拓の 100 年のみを意味するものではない。太古からこの地に先住した人々の歴史である」と。

実は、井口氏は亡夫（笹山峻弘）の出身高校の 7 学年先輩にあたり、恩師を囲み親しくしていただいた。画家であった夫が急逝して今年で 12 年目になるが、7 回忌に私は遺された作品の整理を兼ね、1 冊の作品集を自費出版した。その際、氏に故人との思い出を寄稿していただいた。その後、何度お目にかかれたか…。塔解体をめぐる議論の最中の展示会では終ぞお会いできないまま、着工直前に氏は他界された。

記念塔に隣接する江別市文京台の大学を今年 3 月に退職するまで、国道 12 号線は私の通勤路であった。コロナ禍以前は、毎年 6 月、留学生の学外授業として北海道博物館を見学し、開拓の村で行われる茶会に参加した。記念塔の下に自転車で集合して公園内をサイクリングで巡る楽しい一日であった。博物館の玄関を入ると北側正面のテラ

スから見える記念塔の姿はあらためて力強く美しかった。6 月の空は塔の上にさらに高く見えた。

まさか、職場を離れる年に記念塔の最後を見取ることになろうとは。新学期、解体工事は既に始まっていた。現場の前を通るたびにだんだん低くなる塔、それに反比例するようにクレーンは居丈高になる。あまりにも痛々しかった。井口氏がこの場面に遭われなかったのはせめてもの救いだらう。

いつも授業帰りの車中から定点撮影をしていた私は、ある日、しっかりと間近で見ておかねばという想いに駆られて公園の中に入っていった。駐車場脇の階段を上ると、100m であろうか、長い通路の突き当りの白い鋼板フェンスから塔の根元の上部がわずかに見えた。もっと早く来るべきだった。

入り口で写真を撮ろうと携帯をのぞいていると、塔の方から歩いてきた年配の男性に声をかけられた。彼は、自分の足元を指さして言った。

「これ見てください」

よく見るとそこに蟻が一匹いる。

「この蟻ね、あの白い壁にいたんですよ。それが真っすぐこの径を歩いてここまで来て、すごいでしょう。あんまり不思議なので後をついてきて、これからどこへ行くのか見届けようと思って…」

「あらー、そうですか」

暇なんだろうな、この人…と、正直あまり感動もせず、私は塔の方へ歩を進めた。だが、少し歩いたところで突然ドキッとした。

「あ、井口さん？」

振り返って先程の人を探した。が、すでに見渡す視野のどこにも人影はなかった。

同じ作家の同じ彫刻の謎？

土田副正《夏の日》(札幌) & 《夏の陽》(砂川)

折れたのは捕虫網か？ バケツと虫かごの違い？ 橋本信夫さんが読み解く



写真Aは今年6月、友の会が札幌・北区の新琴似安春川散策路で行った彫刻清掃の集合写真。背後に写っているのが土田副正（福島県出身、1950年—？）のブロンズ彫刻「夏の日」＝**写真B**＝。麦わら帽子をかぶった幼い兄妹の像だが、よく見ると男の子が左手に虫かごのようなものを持っているが、右手に持っているのは棒切れのように見える。

友の会の橋本信夫名誉会長によれば、この作家の同じような彫刻が砂川市の道央道砂川SA駐車場にある。こちらの作品は「夏の陽」＝**写真C**＝。安春川と同じ幼い兄妹の彫刻。こちらの男の子も右手に長い棒のようなものを持っているが、左手には網とバケツを持っているのが分かる。



この二つの作品、共に土田副正の作品だが、制作年は砂川が1988年、札幌は3年後の1991年で砂川が先輩格。元々は同じ作品だったようだ。撮影日時は分からないが、2012年以前に撮影された砂川の**写真D**では兄の右手の棒の先に網らしいものがついている。左手にはバケツを持ち、魚捕りでもする格好。これが本来の姿だったのではないだろうか。



橋本さんによれば、彫刻作品は石膏原型から鋳造すれば同じ作品を6体までコピー出来るので、同じ作家の同じ作品が複数の場所に設置されることはある。しかし、札幌も砂川の作品も設置後数年で網の柄が折れてしまったらしい。しかも、安春川の彫刻は左手に持っていたはずのバケツが虫かごのようなものになっている。

橋本さんは「想像するところ砂川の作品は設置後まもなく魚すくい用の網の柄が折れてしまい。安春川の作品を制作する時は砂川の石膏原型を使い、妹の胴元に合わせてバケツの部分を虫かごに作り替えたのではないかと推察する。また、砂川の折れた魚捕りの網はその後バケツに入れられ、札幌の虫捕り網は行方不明。

それにしても「夏の日」と「夏の陽」。紛らわしい名前のせいかよく混乱を引き起こすことも。しかも破損の状態も似通っており、この辺りの事情は作者に問い合わせるしかないが、土田氏の話がつかめず、真相解明は難しそう。まずは二つの彫刻のミステリー的一幕。

(大内 和)



彫刻 さっぱり！ すっきり！

大通公園彫刻清掃体験記

7月7日行われた大通公園彫刻清掃に参加した札幌大通公園ロータリークラブと藤女子大生の体験記。 (6号に関連記事)

充実した奉仕活動

札幌大通公園ロータリークラブ 鈴木 抄織

彫刻美術館友の会の皆さんと、私たち札幌大通公園ロータリークラブは、ご夫婦が両会の会員というご縁から交流が始まりました。世界的 NGO であるロータリークラブですが、会員数 13 名と小所帯のため、クラブ名にある「札幌大通公園」の彫刻をきれいにする活動のお手伝いができることは、願ってもない奉仕活動です。

毎年、年に 2 回と微力ながらのお手伝いですが、爽やかな札幌の夏の日差しを浴びながら、友の会、藤女子大のサークルの皆さんと一緒に汗を流す。とても楽しく充実した活動となっています。

今回の清掃では台湾からの留学生で、北大法学部で学んでいるバイ・ハオツェンさんも参加してくれました。また、STV の「札幌ふるさと再発見」の取材も入り、ロータリーマークのロゴが入ったジャンパー姿をしっかりと放送してもらえました。毎回、清掃活動の最後に学生さんたちによる、彫刻の由来等のお話もとても興味深く勉強になります。次回も楽しみにしています！

藤女子大「ちょうこくみがき隊」ミニ座談会



参加者： 楯石帆乃香 (3 年) 寺田智咲 (3 年) 森田明花 (3 年)

◇印象に残った彫刻は

森田：《泉》です。大通公園の最も目立ったところに設置されており、大通公園のシンボルのように感じたからです。私が解説を担当したこともあり、愛着が湧きました。

楯石：《湖風》について事前に下調べをし、知識を蓄えた状態で、磨きました。台座に置かれた「湖風」の文字は作者の直筆であると自分の目で確かめることができ、印象に残っています。

寺田：石川啄木像は髪の毛や着物のひだがとても繊細に作られているので、汚れがたまりやすく、磨くのが大変だった。函館へ行く機会があったのですが、函館にもポーズが少し違いましたが、啄木像があっけ驚きました。

◇実際に参加した感想

森田：作品を目にした時に自分が清掃したという自負や公共の物を大切にしようと改めて感じました。実際に触れてみて質感などが感じられ、貴重な経験が出来ました。

楯石：実物に触れ、繊細な彫刻を清掃するという貴重な経験が出来ました。これから先も札幌市民が彫刻を誇りに思えるよう、次の世代につながる活動をしていきたいと考えるようになりました。

寺田：彫刻清掃の帰りに、友だちとテレビ塔に上ったのですが、エレベーターの壁に「星」のイラストが描かれていたことに気付きました！この活動に参加したことで周りにある「彫刻」にとっても敏感になって見える世界が変わりました。

友の会ニュース

大通公園彫刻清掃

大通公園 RC・藤女子大協力

TV取材も兼ねて



札幌大通公園ロータリークラブ (RC) 会員と藤女子大の学生が7月7日、大通公園のシンボル《泉》の像などの彫刻清掃を行った。

この日は曇り空ながら時々小雨のあいにくの天気だったが、RC、藤女子大合わせて26人が参加、友の会会員の指導を受けながら《泉》《石川啄木像》《湖風》《牧童》《開拓母の像》《花の母子像》など6体の清掃に挑戦した。

作業では RC 会員が主に脚立を使う高い彫刻を担当、水洗いやワックスがけをして日ごろの汚れを落として磨き上げた。最後に藤女子大の「ちょうこくみがき隊」のメンバーが作品や作者について調べ上げた成果をもとに解説を加えた。

この日の模様は札幌市の広報番組「札幌ふるさと再発見」として放送するためSTVのカメラスタッフが取材に入り、清掃

ぶりをカメラに収めた。放送は8月3日に行われた。

(5 ページに関連記事)

中島公園

《鶴の舞》《木下成太郎像》

猛暑の中でピッカピカ

今年初めての猛暑日になった7月21日、友の会会員が中島公園で彫刻清掃に文字通り汗を流した

この日は朝から水銀柱がぐ



んぐん上昇する中、《鶴の舞》から作業開始。白コンクリートの作品は凹みに土ほこりがたまり、樹液で黒く汚れが目立っていた。洗剤で丹念にブラシをかけると面白いように汚れが流れ落ちた。十分に乾かした後、コンクリート表面保護材 (アイゾール) を塗布。白さを取り戻した作品が訪れた人の目を楽しませていた。

《木下成太郎像》は台座の草抜きから始め、ワックスをかけ終わるとより堂々とした姿を見せた。この像は「東洋のロダン」と呼ばれた朝倉文夫の作品。戦時下の金属供出を免れた貴重なブロンズ像としてこれからも大切に守っていききたい彫刻でもある。清掃には小さなゲ

ストの参加もあって快晴の空の下、心地よい汗をかいていた。

本郷新記念札幌彫刻美術館

「洗って味わう彫刻のカタチ」

サンクスデーで彫刻清掃

本郷新記念札幌彫刻美術館が年2回開いているサンクスデーの初回が6月23日に行われ、友の会メンバーが前庭で来館者たちと彫刻清掃を楽しんだ。

サンクスデーのテーマが「洗って味わう彫刻のカタチ」で清掃にピッタリのタイトル。

この日は記念館前庭にある



本郷新《横たわるトルソー》1体と《男のトルソー》2体を洗った。

「昨年、彫刻洗いに参加して楽しかったから」という来館者もあり、24人での作業となった。

《横たわるトルソー》の台座がブロックから御影石に変わったことで彫刻の存在感も増し、ワックスの後の磨きにも力が入った。みんなで作品に触れ、洗って、磨いての作業に「立体的、な魅力を味わっていた。

この日はさらに、美術館へ行く途中にある《奏でる乙女》の清掃も行った。寂しげに見えた乙女像にも笑顔が戻ったようだった。

**友の会活動がメディアに
FM北海道「北川久仁子の…」
STVテレビ「ふるさと再発見」**

友の会の彫刻清掃活動が7月から8月にかけてテレビとラジオで放送された。

7月26日、FM北海道(通称AIR-G')の看板番組「北川久仁子のbrilliant days×F」に高橋大作会長が出演した。札幌市内の彫刻の概要や会の日ごろの活動ぶり、特に彫刻清掃の必要性などについて語った。

放送は午後2時20分からと同3時からの2部構成。北川さんの質問に会長が答える形で友の会の由来などが紹介された。出演後、高橋会長は「北川さんは放送前に15体の彫刻を実際に見て放送に備えられ、短い時間の中で的確に話をまとめてくれた。さすがプロ」と話していた。

一方、STVでは8月3日に札幌市の広報番組「ふるさと再発見」で友の会の活動ぶりを放送した。



これはSTVが市の委託で制作しているもので、7月7日、友の会が大通公園ロータリークラブ会員と藤女子大の学生らと共にを行った大通公園の彫刻清掃の様相を取材した。

**本郷新記念札幌彫刻美術館
本郷新《横たわるトルソー》
台座をブロックから御影石に**

本郷新記念札幌彫刻美術館の記念館前庭にある《横たわるトルソー》(本郷新・作)の台座がこれまでのコンクリートブロックを敷いたものから新しく御影石の台座に作り替えられた。



同館の吉崎元章館長と友の会の高橋大作会長との間で台座のことが話題になったことがきっかけで、札幌の業者＝(有)龍盛貿易＝が台座の御影石を寄付する話がまとまった。

作業は6月11日に吉崎館長らが見守る中で行われた。台座は丸みがかかった台形で、幅170センチ、長辺130センチ、短辺95センチ、高さ37センチで、像より少し大きめ。また、像の向きもこれまでと180度入れ替わった。記念館の玄関に続くアプローチの坂を上って行くにつれて少しずつ

見る角度が変わり、これまでと違った印象になったという。

**長万部「平和祈念館」彫刻清掃
本郷新《北の母子像》など4体
町教委からの要請で**

渡島管内長万部町教育委員会から彫刻清掃の指導要請を受けて8月29日、高橋大作会長ら4人が同町を訪れた。



同町の「平和祈念館」には本郷新の彫刻5体などがあり、高橋会長が《嵐の中の母子像》の前で清掃作業のデモンストレーションを行ったあと、《北の母子像》《鳥を抱く女》《鳥の碑》を町教委の職員らが次々にブラシなどを手に彫刻の汚れ落としに挑戦した。将来は町民が継続的な維持管理を行えるようにと町内の美術愛好家も急きよ参加した。

「平和祈念館」は町内で長く医院を開業していた工藤豊吉さんが1983年(昭和58年)の終戦記念日に、人類の平和を祈って寄付したものだ。敷地内には本郷新の5体の作品のほか、館内には丸木位里・俊の《原爆の図・母子像》もある。

事務局日誌▼24年5月11日＝新年度第1回彫刻清掃(中央区南4東4)新渡戸稲造記念公園▼26日＝真駒内彫刻清掃▼6月9日＝安春川散策路彫刻清掃▼13日＝定例役員会(エルプラザ)会報89号編集企画ほか▼23日＝彫刻美術館サンクスデー参加(彫刻美術館)▼29日＝会報88号発送▼7月7日＝大通公園彫刻清掃(大通公園 RC、藤女子大など参加)▼11日＝定例役員会(エルプラザ)▼8月8日＝定例役員会(エルプラザ)編集企画▼22日＝学習会(エルプラザ)デジ彫解説文作成▼29日＝彫刻清掃指導で会長ら長万部町平和祈念館へ

編集後記▼札幌芸術の森美術館の元館長だった奥岡茂雄さんの著書「北の美のこころ」(2015年刊)にこんな一文があった▼「美術館とボランティアとは、(中略)共通の目標に向かって相互の信頼と協力のもと、双方ともに全力をふりしぼって責務を果たそうとする『戦友』の間柄とってよいかもしいない」▼友の会と彫刻美術館もそんな関係を目指していきたいもの。(大内)

札幌彫刻美術館友の会
 会報「いずみ」 No.89
 2024年10月1日発行
 発行人 高橋 大作
 編集者 大内 和
 札幌市清田区清田5-4-6-30
 011-884-6025
 印刷 山藤三陽印刷

会報「いずみ」89号 目次		
自作自選59	《GINGER》	内藤満美・・・表紙
宮の森の四季59	『『味わい』の『心地よさ』	上野勝久・・・2
風見鶏「蟻と塔」		笹山恵利・・・3
レポート「同じ作家の同じ彫刻の謎」		・・・4
レポート「大通公園彫刻清掃体験記」		5
友の会ニュース		6-7
大通公園彫刻清掃/中島公園清掃/サンクスデー彫刻清掃/友の会活動がメディアに/《横たわるトルソー》台座交換/長万部町で清掃指導		
事務局日誌/編集後記/目次/美術館行事予定ほか・・・8		

本郷新記念札幌彫刻美術館行事予定

本館

**■第4回本郷新記念札幌彫刻賞受賞記念
藤原千也展**

—生まれようとしたときの光をみたい

10月5日^土～2025年1月26日^日

第4回本郷新記念札幌彫刻賞を受賞した藤原千也(1978年、札幌生まれ、十勝管内中札内村在住)の作品展。木の持つ魂の感受を求めて巨木の内部に潜り込み、ひたすら斧やノミで削り制作した作品や、流木を用いたインスタレーションなど最新作を展示する。

記念館

■コレクション展 2024—2025

開催中～2025年5月25日^日

本郷新記念札幌彫刻美術館
 札幌市中央区宮の森4条12丁目
 ☎011-642-5709

友の会ホームページ公開中です！ご覧ください
<https://sapporo-chokoku.jp>